

臨床レポート

ウサギの甲状腺癌の1例

西部美奈子

要約

5歳、雑種の雌のウサギが頸部の皮下腫瘍を主訴に来院した。一般状態や血液検査に異常は認められず、周囲リンパ節の腫脹もみられなかった。腫瘍を外科的に摘出したところ、腫瘍は総頸動脈に隣接しており、甲状腺由来腫瘍が疑われた。病理組織学的検査により、濾胞充実性甲状腺癌と診断された。術後9カ月、経過は良好で転移も認められていない。

キーワード：ウサギ，甲状腺癌，外科摘出

近年，エキゾチック動物の獣医療の発展により，ウサギも高齢の症例が増え，さまざまな腫瘍が報告されているが，ウサギでは甲状腺腫瘍の報告 [1] はほとんどない。

伴侶動物では，犬の甲状腺癌は悪性度の高い腫瘍として知られている [2]。今回，ウサギにみられた片側性の甲状腺癌について外科的に摘出を行った後，経過が良好な症例に遭遇したので，その概要を報告する。

症例

症例は雑種のウサギ，雌，5歳，体重2kg，飼い主が頸部の皮下腫瘍に気付いて来院した。一般状態は良好で，身体検査では，体温38.2℃，心拍数240/分であった。頸部の皮下腫瘍の大きさは，2.0×1.5×1.5cmで，左側頸部皮下に存在し，周囲リンパ節の腫脹は認められなかった。

血液検査所見（表1），頸胸部レントゲン所見（図1）とも異常は認められなかった。超音波検査では，腫瘍全体が低エコーで均一だった。

治療および経過

初診時，超音波ガイド下で腫瘍の針生検を行った。細胞診では，卵円形核と好塩基性の細胞質を持つ上皮性細胞集塊がみられ，明瞭な悪性所見は認められなかった（図2）。以上の結果から，上皮性細胞由来の良性腫瘍を疑い，第10病日に皮下腫瘍摘出術を行った。

表1 血液検査成績

項目	第1病日
RBC ($10^4/\mu\ell$)	530
WBC ($/\mu\ell$)	5,800
HGB (g/dℓ)	11.4
HCT (%)	35.9
PLT ($10^4/\mu\ell$)	25.8
Glu (mg/dℓ)	115
BUN (mg/dℓ)	16.1
Cre (mg/dℓ)	0.7
AST (IU/ℓ)	32
ALT (IU/ℓ)	44
ALP (U/ℓ)	231
T-Bil (mg/dℓ)	0.3
TP (g/dℓ)	5.8
T-Cho (mg/dℓ)	12
Ca (mg/dℓ)	12.1



図1 頸胸部のレントゲン画像 (RL)。著変は認められない。

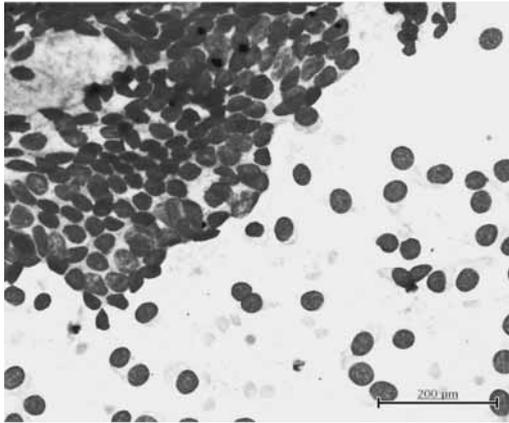


図2 腫瘍の細胞診(ヘマカラー染色)。均一な大きさの楕円形核を有する上皮性細胞集塊が認められる。



図3 皮下腫瘍(白矢印)が総頸動脈(黒矢印)に隣接している。



図4 周囲組織と鈍性剥離した腫瘍(白矢印)。

麻酔は、メドミジン0.1mg/kgを前投与し、ケタミン5mg/kgで導入、イソフルランをマスクにて吸入させて維持した。皮膚を切開すると腫瘍は、胸骨舌骨筋の奥に位置し、総頸動脈と気管に隣接しており(図3)、解剖学的に左側の甲状腺由来と考えられた。腫瘍は被膜に包まれており、周囲組織への浸潤は認められなかった。腫瘍周囲の血管を結紮し、被膜をモスキート鉗子で鈍性剥離した(図4)。腫瘍の頭側には上皮小体が確認でき、腺外上皮小体は鈍性に分離可能であった

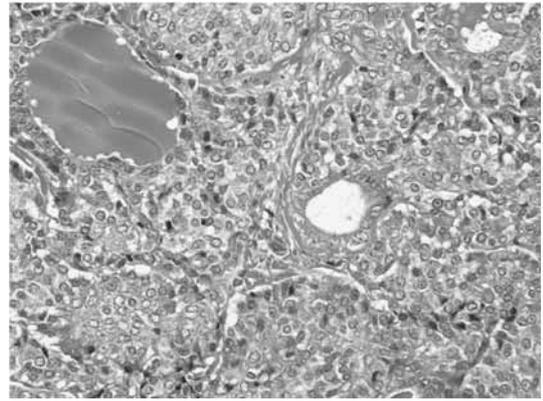


図5 腫瘍の強拡大像(HE染色)。上皮性腫瘍細胞の胞巣状増殖パターンとともに、濾胞構造が認められる。

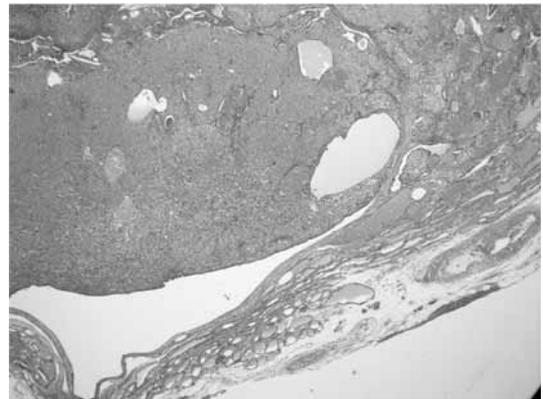


図6 腫瘍の弱拡大像(HE染色)。既存の領域へ腫瘍細胞が浸潤・増殖している。

め温存した。

摘出した腫瘍の病理組織学的診断は、濾胞充実性甲状腺癌であった。病理組織学的に、腫瘍では腫瘍細胞の胞巣状、充実性増殖がみられ、散在性に濾胞構造も認められた(図5)。また、既存組織へ腫瘍細胞が浸潤性に増殖していた(図6)。これらの組織像は、犬でよくみられる濾胞充実性の増殖パターンに類似していた。

術後1週間は、抗生物質としてエンロフロキサシン、腸の運動機能改善薬としてメトクロプラミド、食欲増進薬としてシプロベタジン塩酸塩水和物を投与した。術後8日目に抜糸した。術後11カ月、肺転移はなく、経過は良好である。

考 察

甲状腺腫瘍は、一般に頸部腹側の皮下腫瘍として認められ、犬では腫瘍が大きくなると発咳や呼吸困難、嚥下困難などが臨床症状として認められることがある[2]。ウサギでは甲状腺癌の報告[1]はほとんどなく、その生物学的挙動は知られていないが、本症例は腫瘍を早期に発見・摘出できたことから一般状態は良好で

あった。

摘出した腫瘍の組織所見は犬の濾胞充実性甲状腺癌に類似していたが、肺やリンパ節に転移はみられず、局所浸潤も認められなかった。

犬の甲状腺癌は悪性度が高く、肺転移や咽頭後リンパ節への転移が高率に認められる [2]。本症例も診断時には転移や局所浸潤は認められなかったが、今後注意深い経過観察が必要であると思われる。

謝 辞

本症例において、多大なご指導とご助言を賜りました岩手大学獣医病理学研究室の御領政信教授、佐々木淳助教に深く感謝致します。

引用文献

- [1] Dinges HP, Kovac W : Metastasizing carcinoma in the rabbit, Z Versuchstierkd, 14, 197-204 (1972)
- [2] 桃井康行 : 犬の腫瘍, 479-483, インターズー (2008)